

2017. 11. 30 (木)

Agents & Knights : むちゃをする人たち

内 田 充 美

イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」彼らは、これに対して答えることができなかった。

(ルカによる福音書 14 : 1-6)

はじめに

今日グルーベル先生に読んでいただいた聖書の箇所は、わたしの心にずっと留まっているエピソードです。掟によって働いてはいけないと定められている安息日に、イエスさまが病人をいやされる場面です。「おきて破りだ！」と非難する人たちに対して、イエスが「誰かが井戸に落ちるのを見ればすぐに引き上げてあげようとするでしょ」というふうにご答えます。目の前で困っている人がいれば、助ける。すくなくとも、なんらかの行動を起こす、これは、まずは、誰でもうなずける行動規範と言えるのではないのでしょうか。

今回のテーマは「『働く』ってなんだろう？」です。今日は、フィクションの中に描かれた仕事を取り上げます。現代のお仕事——ちょっと特殊なお仕事——と、6-700年くらい前のお仕事の話をしていっしょに考

えたいと思います。

現代フィクションの「むちゃな」エージェントたち

まず、現代のお仕事です。3人紹介しませう。写真を見てください。

ジョナサン・パインさん、ホテルのナイトマネージャーをしていましたが、なぜかイギリスの情報機関にスカウトされて、武器商人シンジケートの潜入調査を（なぜか）引き受けます。ID・経歴を偽装して、瀕死の大けがをした状態で、相手の本拠地に丸腰で入り込みます。さまざまな危機を経て、信頼を得ることに成功し、かなりよい地位まで上りつめ、最終的には武器商人の摘発につながる働きをみごとに成し遂げます。任務完了です。

ふたりめ、ジェイムズ・ボンドさん、イギリス情報機関のスパイです。この作品では、

ミッションの遂行中に上司に裏切られて、同僚にライフルで撃たれ、瀕死の重症を負います。自分を裏切った上司と組織を恨んで、自堕落で荒れた生活を送ります。なのに、その組織が重大な危機に直面していると聞くと、いてもたってもいられなくなって組織に戻り、衰えた身体にムチうって、また再び命がけで、組織のために戦い、上司を守ろうと全力で働きます。自分の住んでいた家さえ、爆破してしまう。

3人目、ジャック・パウアーさん、合衆国のテロ対抗組織に所属する捜査官です。24時間の出来事を24回の60分ドラマで描く人気シリーズでした。この人もいろいろむちゃな働きをします。国家の一大事という場面で、同僚だか上司だか忘れましたが、正面から銃で撃ってしまう。という場面が衝撃的でした。

3人とも、基本的には、最低限の武器だけ持って相手方に乗り込んで行って、非常に不利な状況にあっても決してくじけず、異常なほどの強い信念に基づいて、超人的でむちゃな働きをするという点が似ています。かなり乱暴でひどいことをやっても、なぜか肯定的に描かれるという点も共通しています。

このクラスの一流のエンターテインメントではストーリーの構成や細かい演出がとてもよくできているので、見ている時はすっかり引き込まれてしまって、途中で疑問に感じるということはあまりありません。しかし、見終わって、すこし熱が冷めて、距離をおいてふりかえてみると、ある疑問にとらわれます。．．．なんで、この人たちはこんなにむちゃをするのだろう。．．．ここまで不利な状況で、なんでそこまで頑張れるんだろう。．．．ストーリーとして、あまりにも不自然なので

はないか、と。そういう疑問です。

中世フィクションの「むちゃな」ナイトたち

そこで、次に紹介する600年以上前のお仕事の話なのですが、これから話す内容を、言語学の研究のなかで知った時、「あーこれなんだ」と思いました。西洋文化においては、正義のためにむちゃをする人は何百年も前からいたんです。むちゃの伝統、むちゃの系譜です。この人たち。騎士＝ナイトというお仕事について紹介したいと思います。ひとことで騎士と言っても歴史が長くていろいろさまざまです。今日はアーサー王伝説の中の騎士のくらしを取り上げて話します。

騎士たちの主な仕事は、(1)冒険をすること、(2)武道の試合をすること、(3)王さまの主催する宴会に出席することです。冒険というのは、どこかの村の人がドラゴンにつかまっているのを助けに行くとか、どこかの城が魔法にかかっているのを解除していく、化け物のすみかに隠してある宝物を奪い返しに行く、よその王さまやお姫さまが幽閉されているのを救出する、それからもちろん戦に加わって兵士として戦うなどの行為を含みます。そして、冒険から帰ってきたら、アーサー王の宴会の席で、その武勇伝を仲間の前で報告して、あることないことおもしろいホラ話をする。そんなくらしをしていたとされています。

騎士といえば、この絵に描かれているような鎧兜(よろいかぶと)を着ている姿を思い浮かべると思いますが、これが上下一式で重さが4-50キログラムあったということです。重たい金属性ですので、そのまま身につ

けると当たって痛いですね、頭と身体にまず布をぐるぐるに巻いて、その上に金属の鎧兜をつけます。どのパーツも基本的にはヒモでくりあげて身につけるので、いったん鎧兜をつけてしまうと、脱ぐことも簡単にはできません、水もろくに飲めない、というほど不快なものだったそうです。この姿で長旅をして、ドラゴンや魔法使いと戦うのですから、たいへんなお仕事です。

この頃の騎士とは、次のような人であるべきとされていたそうです。「騎士は、礼儀正しく、寛大で、言葉遣いは正しく、控えめで、忠実で、名誉を重んじ、邪悪な心はかけらもなく、慈悲深く、裏切ることなく、物腰柔らかく、苦しむ者に心を寄せ、寛大でなければならぬ。貧しい者を進んで助け、好き嫌いを抜きにして正しい判断をしなければならず、不名誉よりは死を選ぶべし。…」だから、正々堂々、ズルをしないで戦う、ということがとても重要だとされました。これは、騎士にとっての行動規範、言いかえると、騎士としての生き方の美学を表すものと言えます。騎士の活躍を描いたお話は何百年にもわたってたいへんな人気で、多くの人によって語られたり、読まれたりしてきました。

さまざまな行動規範・生き方の美学：
無用な衝突を避けるために

日本の文化にも「武士道」という言葉がありますが、武士道であれ、騎士道であれ、それぞれの文化の中にすっかり溶け込んでしまっていて、ふだんは気づかないけれども、人々の価値観に影響を与え続けているものがあるということなのだと思います。そういう

行動規範を暗黙のうちにみなが受け入れているからこそ、かなりむちゃな話でも、それを見る人は受け入れることができるのでしょう。エンターテインメントの作り手も、こういった、生き方の美学が受け入れられるという確信があるからこそ、そういうむちゃなストーリーを書くことができるのではないのでしょうか。

ただ一方で、気をつけないといけないかな、と思うことがあります。こういった暗黙の行動規範や生き方の美学は、必ずしも、どこでも同じわけではない、という点です。たとえば、騎士の理想像には「言葉遣い正しく、控えめ、物腰柔らかく」とありましたが、世界中の文化を調べてみると、逆に「荒々しい言葉遣いと振る舞いで、存在感を主張せよ」という文化もあるはずで、騎士道では、卑怯な戦いをしてはいけないと教えますが、逆に、相手の裏をかいてでも、とにかく勝利を収めることだけが重要である、とする文化もあるかもしれません。

また、騎士たちは武道の試合のさいに、心に決めた女性の衣服や装飾品を、楯など目立つところにひらひらとつけて戦ったそうです。忠誠心を表すためです。日本の武士が女性の着物の一部を刀や鎧にひらひらと飾っていたという話はあるのでしょうか。おそろく、武士たちはやらなかったでしょうね。

いろいろな考え方、行動規範が存在するのだ、という理解がないと、いきなり危険な感情のぶつかり合いが起きてしまったりします。「なんだこいつ、戦いの場でリボンなんかつけやがって、神聖な場を何だと思っているんだ」という感じで、武士と騎士に共通する生き方の美学というのはたくさんあります。主君に忠誠を尽くす、弱いものの味方に

なる、兵士ではない一般市民を傷つけたり困らせてはいけな、い、などなど。大切な部分では、ほぼ一致しているのに、ちょっとした違いばかりが気になって、やらなくてもいいケンカが始まってしまう。

わたしたちの日常生活でも、他人の言葉や行動に何か違和感を感じた時、ムツとしたり、相手を非難したくなることがあります。そうするとなんだか人間関係がギクシャクします。そうではなくて「自分たちの文化においては、こういうことを重んじるのですよ」と、ていねいに伝える、それから、「あなたたちの文化においてはどうですか」と、ていねいに訊いてみる、そういった手順を踏むことがだんだん大切になってくるのではないかなというふうに感じています。

冒頭の聖書の例を思い出してみると、小さな子どもが井戸に落ちるのを見たらどうしますか、もちろん助けようと思います。そこが一致するというをまず確認しあう。「そんなん当たり前やん」とひとりで勝手に思っ

黙っているのではなく、あ、ここは共通なんだと一緒に確認する、この一手間があると、世の中、少し生きやすくなるのではないかなと思います。

おわりに

さて、ところで、今日はじめに紹介した現代のスーパーヒーローは、いわゆる「変身」はしないんですよ。日本のエンタメでは変身をして、スーパーパワーを持った別人格になって戦う、というパターンがけっこうありますが。見方によっては、あまりフェアな戦い方でないかもしれませんね。このあたりにも、なにか、文化の差が現れているのかもしれない。みなさんも、好きなドラマや映画に描かれたいろいろな仕事を、いつもと違った視点から見てみると、何か新しい発見があるかもしれません。ためしてみてください。

(社会学部教授)